

令和6年度 第1回運営協議会 記録

令和6年7月9日(火)
10:00～本校会議室にて

出席者

- ・立川 仁典 (横浜市立大学 教授)
- ・遠藤 五郎 (本牧緑ヶ丘町内会 会計)
- ・石井 清 (麦田町町内会 会長)
- ・池田 加津男 (牧陵会 相談役)
- ・大竹 幸代 (後援三徳会 理事長)

本校より ・坂元(校長) ・村井(副校長) ・高木(教頭) ・田口(運営 G) ・亀井(情報 G)
・吉村(研究 G) ・服部(生徒 G) ・松井(安全 G) ・田村(広報 G)
記録 ・稲葉(運営 G) ・内山(運営 G)

欠席者

- ・新井 立夫 (文教大学 教授)
- ・高橋 秀吉 (横浜市立本牧中学校 校長)
- ・増田 宣明 (横浜市立仲尾台中学校 校長)
- ・佐久間 弘子 (本牧緑ヶ丘町内会 会長)

- ・校長挨拶
- ・各委員自己紹介
- ・職員自己紹介
- ・運営協議会会長選出 立川先生にお願いいただく(拍手で承認)

- ・スクールポリシーについて

校長：今年度から学力向上進学重点校に指定された。また、本年はSSHの3年目で中間評価の年になる。スクールポリシーについては本来事前にお示しし、意見をいただくところであるが今年度は時間的制約もあり、4月から運営Gで検討したものを県に提出した。委員の意見をうかがって、次年度以降、改善していきたいと思う。

グラデュエーション・ポリシーについては校内外の人にわかりやすいよう3つにしぼった。

スクールポリシーの(1)は学力向上進学重点校を受けてのもの。(2)は確かな学力を支え、豊かにするためのもの、(3)はリーダーの資質として必要なものとして策定した。

カリキュラムポリシーについては資料に記載のとおりだが、この後の各グループからの学校目標の説明のなかでも触れる。

アドミッションポリシーについても、入学者に求めるものをわかりやすく記載した。

- ・ グランドデザインについて

校長：さきほどのスクールポリシーを在校生およびその保護者、入学希望者およびその保護者にとって、目で見てわかりやすいように整理した。スクール・ミッションは県教委から本校に課せられたものである。カリキュラムポリシーについては、様々な取り組みにおいて目指すものを「探究力」、「挑戦」、「対話」、「他者尊重」という4つのキーワードで表現した。

- ・ 学校教育計画について

校長：今年度より新たに令和9年度までの4年間の学校教育計画を策定した。本日の説明は割愛するが、資料13ページに記載されているので目を通していただきたい。

- ・ 各グループより学校評価報告書の目標説明

田口(運営 G)：難関大学に進学するという表面的な指導ではなく、進路説明会や面談を通して生徒・保護者と協力しながら進路と向き合う体制を作りたい。全職員が参加できる「緑の意見交換会」を実施しながら、職員全体での学校運営を進めていきたい。

亀井(情報 G)：授業時間の確保とシステムやソフトウェアの導入で業務を効率化し、教員が生徒と向き合う時間の確保を目指している。

吉村(研究 G)：SSH3年目で中間評価の年になる。今年は、生徒の発信力の育成を目指すとともに、取り組みに対する評価方法の確立に力を入れている。

服部(生徒 G)：学校行事等は生徒自身での運営を基本としている。生徒たちが担任や顧問、関係する先生方との意見交換や折衝を通して、企画をよりよく運営していく能力を養っていきたい。

松井(安全 G)：多様な生徒が在籍し、慎重に扱うべき事柄が増える一方で、若く、経験の浅い教員が増えている。ケース会議等を開催する中で、経験を通して教員の対応力を育成することを目指した。また、複数の教員で相談の場を設けて課題を共有することが、ごく普通の取り組みとなるようにして行きたい。

田村(広報 G)：学校説明会などで本校の姿を伝えていきたい。また夏祭り等、地域とのつながりを継続しながら、取り組みを広げていきたい。

- ・ 委員からの意見、感想など

委員A：理数教育推進校の指定は来年度以降どうなるのか？

校長：理数教育推進校は今年度で終了だが、目指す内容としてはSSHの取り組みと重なるところが多いので、来年度以降はSSHの取り組みをより充実させていくことになる。

委員 B：今の生徒は、昔の生徒より手厚い指導があって幸せだと思う。地域の課題としては少子高齢化が顕著である。これを課題研究の題材として対応策の提案や地域の検討会への高校生の参加などができたらいいのではないかな。

委員 C：少し本題から外れるが、学びの奨励基金について、今まで 10 名くらいに支援した。活用方法についての提案や意見があればいただきたい。

吉村：地域とのつながりを深めていきたいという意見は、生徒による SSH 運営会からも出ている。課題の解決策を提示するのは経験の浅い高校生にとっては難しいが、ヒントを与えてもらうなどすれば一緒に考えることなど是可以するかもしれない。学びの奨励基金については、スタディツアーなどへも支援ができるようになればありがたい。

委員 B：地域とのつながりでは吹奏楽部のコンサートなど住民はとても楽しみにしていてありがたい。自身の経験から意見を言わせてもらおうと、理系的な取り組みだけでなく、もっと英語力を磨くべきだと思う。社会に出れば英語での意見交換などが必要になるし、語学力が高まることで視野も広がる。

田口：(英語の教員として)英語が好きだという生徒が多い印象である。論理的に伝える力や理解する力を育てるための取り組みを行っている。論理的にという点では探究の取り組みに通じる部分がある。

委員 D：学校も運営方針を自ら計画し点検・反省、改善策の提案を行わなければならない状況にかつて自分が仕事をしていたときに PDCA を回せと言われたことを思い出した。

委員 E：今の子どもたちが、意見を出しあって協力することなどに慣れているのはこのような取り組みのおかげなのだと思う。

委員 A：大学生でも教員の話はあまり聞かないが、先輩の話は聞くということはよくある。

・次回以降の運営協議会について

副校長：次回は SSH などの取り組みに関する特色部会と学校運営に関する評価部会に分かれてお話をいただくことになるのでご予定いただきたい。

・閉会のあいさつ

校長：ご参加いただきありがとうございました。今回は日程が合わない委員の方が複数いらっしゃる中開催し恐縮である。次回は多くの委員が参加できるように日程調整をしたい。またいつでもお気づきのことがあれば学校にお伝えいただけるとありがたい。

令和6年度 第3回運営協議会 記録

令和6年3月14日(金)

14:00～新体育館多目的室にて

出席者

- ・立川 仁典 (横浜市立大学 教授)
- ・新井 立夫 (文教大学 教授)
- ・高橋 秀吉 (横浜市立本牧中学校 校長)
- ・増田 宣明 (横浜市立仲尾台中学校 校長)
- ・遠藤 五郎 (本牧緑ヶ丘町内会 会計)
- ・佐久間 弘子 (本牧緑ヶ丘自治会 会長)
- ・石井 清 (麦田町町内会 会長)
- ・池田 加津男 (牧陵会 相談役)
- ・大竹 幸代 (後援三徳会 理事長)

本校より ・坂元(校長) ・村井(副校長) ・高木(教頭) ・田口(運営 G) ・亀井(情報 G)
・吉村(研究 G) ・服部(生徒 G) ・松井(安全 G) ・田村(広報 G)
記録 ・稲葉(運営 G) ・内山(運営 G)

欠席者 なし

- ・校長挨拶

運営協議会会長立川先生の司会の議事進行。

- ・令和6年度の学校評価実施報告書(校内評価)について各グループより説明

田口(運営 G): 中間評価において大学合格をゴールとしたキャリア支援でなく社会的自立を踏まえたキャリア形成を培っていただきたいとの意見を踏まえ、1年生を対象に社会人講話を実施した。社会人として活躍する中でも、失敗を経験したり、トライ&エラーの繰り返しを行ったりしながら日々を過ごしている、などの話を聞かせていただいた。受講者のアンケート結果は概ね好評であり、可能であれば続けていくことを検討している。

進路実績に関しては数字的には例年並みであるが旧帝大を含むなど内実は向上していると感じる。90%を超える卒業生が本校の進路支援に対して肯定的であるというアンケート結果が出ており、担任団を含め進路指導体制は整っていると感じているようである。

1・2年生の保護者に向けた進路説明会を新たに本日実施し、約半数の保護者である280名ほどが参加予定である。今年度を踏まえ、より効果的な開催時期や内容を検討していきたい。

委員A：探究活動が卒業後も続くという意味では高校の授業における探究の意味合いをよく考えて取り組ませてほしい。大学における研究のまねごとをして終わりではなく、高校卒業後の活動に生かせるような取り組みを目指してほしい。

保護者向けの進路説明会では予備校だけではなく緑高のOBの大学関係者などを招くことができれば、より深い情報を聞けるのではないかな。

大学受験については外部試験を利用した受験方法を推進していただきたい。

田口：本校ではGTEC検定版の活用を推進している。

委員B：探究の授業の内容では国際バカロレア（IB）のプログラムを参考にしてみてもいいのではないかな。

亀井(情報 G)：病気等で通常のカリキュラムをこなせない生徒の多様な学習ニーズに対し、オンライン授業と通信教育の2本柱で対応した。オンライン授業、通信教育の両方で単位認定につなげた実績ができたので、来年度以降はより充実させていきたい。

吉村(研究 G)：SSHの中間評価の結果については高い評価ではなかったが、改善点を指摘されるというよりも今の活動の充実を提言された。こちらとしても取り組みの足りない部分を感じている。今回が3年間SSHの取り組みをした最初の卒業生ということになる。アンケートでは肯定的な意見が多く、来年度以降もブラッシュアップをしていくとともに、各授業でも探究的な活動を取り入れてもらい緑の探究の授業との往還を図っていきたい。また活動成果については外部の発表会への参加を増やしていきたい。

委員C：卒業生がOB・OGとして探究のサポートをしてもらえるような体制ができればいいのではないかな。

吉村：こちらとしても考えていきたい。

委員D：同窓会としての参加にも結び付けて関わらせていただきたい。緑高セミナーという形ではなく探究の部分にフィードバックしたい。

服部(生徒 G)：生徒への声掛けに取り組んでいるが、答えを与えることに終始してしまうと成長につながらないこともある。考える場面を作って生徒の自立につなげていきたい。

服部：兼部を入れれば加入率は100%を超えている。部活動に入っていないのはクラスで5人程度ではないかな。

松井(安全 G) : 支援を要する生徒の数が増えているような気がしていてアプローチを考えていかななくてはならない。生徒どうしのトラブルの自己調整ができなくなっている生徒が増えている。家庭の協力が必要になるが、親が子どものストレスの原因となって問題が発生している場合もある。親権というものがあるため学校の介入が難しいところもある。また若手教員が増えており、教員のトラブルへの対処方法のアドバイスなども必要性を感じる。個人的には家庭訪問なども手段だと思っているが、中学校ではどのような工夫をしているか知りたい。

委員 E : 中学校でも保護者対応に苦慮している。顔が見えないと対応が長引くこともあるため来校していただいて話をすることが多い。中学校は学区があるから可能だが高校では難しいのでは。

委員 B : 電話での対応が多い。テクニックとしてはまず生徒をほめる。ほめてから本題に入る。ほめるだけの電話をすることもある。これで次回から電話がつながりやすくなる。

委員 C : 大学でも親を含めた面談を実施することもある。

田村(広報 G) : 中学生向けの学校説明会では、入試で面接試験がなくなった影響か、参加者は以前より若干減った感があるが盛況であった。

学校活動全般を情報発信する努力をしている。プリントでの配付が家庭に届かないという意見もありマチコミメールを活用したところ、好評を得ている。

地域連携に関しては、夏祭りへの参加や、附属小の小学生の企画へのお手伝い派遣などをした。学校や地域に育てられているだけの状況から、参画する側として経験を積ませたい。お声がけをしていただければ学校からも生徒にアナウンスしていく。また、職員も外部との連携に慣れていないところが多いので活動しやすい環境を整えていきたい。

委員 F : 第 3 地区は人口 2 万 5 千人くらいいて、現在街づくりの計画をしている。このような企画に参加してくれる高校生を求めているので機会があれば紹介してもらいたい。

委員 B : この地区の 2 中学校 4 小学校で本牧ピンクシャツデーをやっている。来年あたりに声をかけるかもしれない。

・ 閉会のあいさつ

・ 来年度の運営協議会について